

# 更新後草地の施肥管理

現地試験の途中経過報告  
【施肥管理による植生・収量への影響】



更新した草地の良好な植生が長持ちしない…。その大きな要因として、実は「施肥管理が上手くいっていない」ことが挙げられます。現地試験のデータを踏まえ、施肥管理の基本を振り返ってみましょう。

## 1. 更新後の施肥管理

牧草密度を維持するポイント



マメ科率に合わせた  
適正な窒素施肥が重要

中途半端な施肥管理は、チモシーなどイネ科牧草そしてマメ科牧草、その両方に悪影響を及ぼします。同じチモシー主体の草地でも、マメ科率によって施肥すべき窒素の量は最大で4倍も異なります(下表)。マメ科率に応じた施肥を実施することで、草地の牧草密度と良好な植生を維持しましょう

道東地区チモシー草地・年間施肥標準量 kg/10a (火山性土)

	窒素	リン酸	カリ
マメ科率30%以上	4	10	18
マメ科率15~30%	6	10	18
マメ科率5~15%	10	8	18
マメ科率5%未満	16	8	18

4倍!

マメ科率で必要  
な窒素量は  
大きく異なる



## 2. 牧草の種類に応じた施肥 (1番草収量を増やすコツ)

1番草収穫後の再生違い (チモシー vs. オーチャード)

チモシー(刈取後2週間後)

刈り取られた茎は枯死  
刈り取られた茎は枯死しない

脇から新たな分けつが再生  
(時間がかかる)

生き残った分けつから素早く再生  
(時間がかからない)

オーチャード(刈取後4日後)

“この違いを踏まえ”、1番草確保のための施肥術は…

- チモシー：世代交代は1番草収穫後。「1番後の速やかな追肥」で分けつを確保!
- オーチャード：世代交代は3番草収穫後。「秋の窒素施肥」で分けつを確保!
- 共通：春の早めの施肥で、有穂茎数を確保し、収量アップにつなげましょう!



## ～施肥管理による収量・植生への影響～

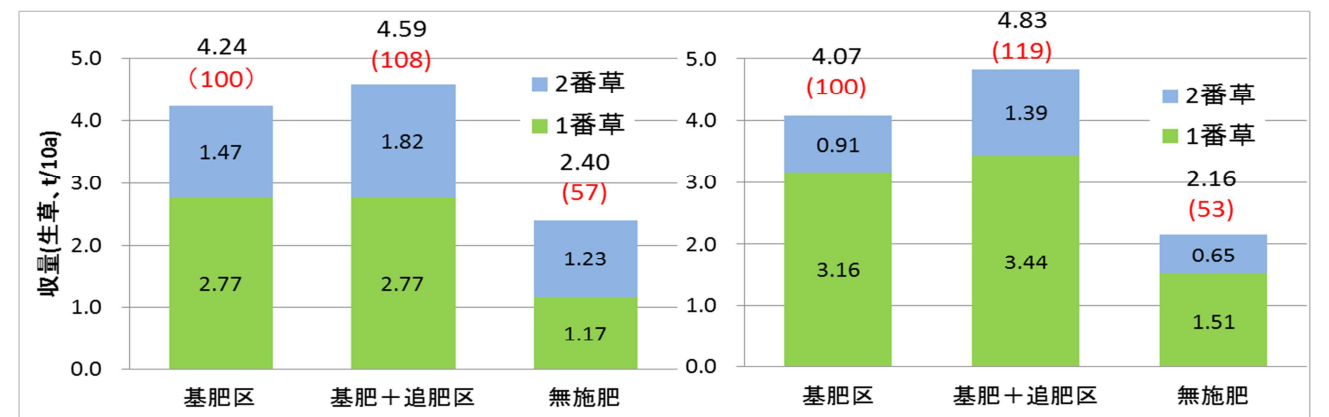


「無施肥」「基肥のみ」「基肥+追肥」で植生維持&収量を調査 (虹別地区で実施)

処理区	投入成分量 (kg/10a)		
	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
① 基肥のみ	6.5	11.7	11.7
② 基肥+追肥	10.0(6.5+3.5)	13.1(11.7+1.4)	15.2(11.7+3.5)

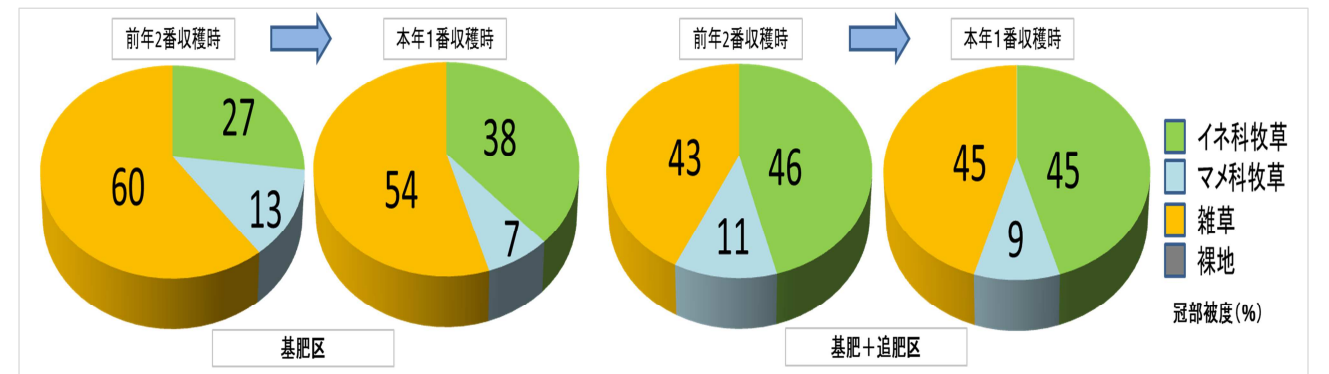
※ ②の窒素量はマメ科率区分3 (5%~15%)、火山性土で設定

◇ 収量への影響 【1年目 (H26)】 【2年目 (H27)】



【結果概要】  
 ・2か年ともに「追肥散布区」の収量が基肥区を上回る  
 ・「追肥区では2年目の収量が上がった」ことから、前年の追肥が次年度の収量に影響していることが示唆されました。

◇ 植生への影響 【前年2番草収穫時と本年1番草収穫時との比較】



【結果概要】  
 ・追肥区において2番草収穫時のイネ科牧草割合が高くなり、植生が次年度まで維持される傾向が見られました(植生の推移は引き続き調査)。



追肥の散布は、更新した草地の植生維持・収量確保に重要です。スラリーや堆肥など有機物と肥料を上手に組み合わせ、草種やマメ科率に応じた施肥を実施しましょう。詳しくはJAまたはホクレン資材課まで

